心の一新によって ローマ 12:1~2

コロナ禍にあって「新しい生活様式」が提唱され、マスク、除菌、三密を避けるということが強調されてきました。最初は違う生活様式ですから意識しないとつい忘れてしまったり、やや不自由さを感じましたが今は自然と身についてきたように思います。今日の聖書の箇所はパウロが礼拝について教えていますが2節の最後に「心の一新によって自分を変えなさい」とありますように、礼拝は私たちが神様にあって新しくされる時です。今日はみことばから礼拝に対する神様のみ心を共に学んでゆきたいと思います。まず12:1 は、「そういうわけですから」という言葉で始まっていますが、「そういうわけ」とはどういうわけなのでしょうか。「そういうわけですから」というのは、ローマ人への手紙の1章から11章に書かれてるすべてのことを指しています。11章までパウロは教理的な主題を説明します。1章から3章は人間の罪について、4章から6章は信仰について、7章と8章は信仰者の苦悩と勝利、そして9章から11章ではユダヤ人に対する神の計画が論じられています。ですからローマ人への手紙は、11章までは、手紙というよりは、まるで論文のようです。パウロは12章になってはじめて、クリスチャン生活の具体的なあれこれに触れ、ようやく、手紙らしくなります。

なぜ、こんなに長い前置きがいるのだろうと、不思議に思われるかもしれません。「ややこしいこと言わずに、あれをしろ、このようにふるまえと言ってくれた方がずっと楽だ」とも思います。しかし、キリストを信じている私たちは意識するしないに拘わらず自分のしていることの意味をよく知っておく必要があります。たとえばどうして礼拝するのでしょうか? どうして献金するのでしょうか? どうして献金するのでしょうか? どうして奉仕するのでしょうか? 私達の交わりと信じていない人たちの交わりは一体何が違うというのでしょうか。「教理」とは、神がどのようなお方で、私たちのために何をしてくださったかを解き明かすものです。それがあってはじめて私たちは、自分が何をすべきか、何をしたら良いのかを知ることができるのです。ローマ12:1の「そういうわけですから」というのは、神がイエス・キリストによって私たちを罪から救い出してくださったことを指していますが、もう少し具体的に言うなら、それは、神のあわれみを指しています。神が、私たちを救ってくださったのは、私たちに救われるに価するだけのものがあったからでしょうか。決してそうではありません。私たちは、みな罪人であり、神の前には、無力なもの、汚れたもの、惨めなものであったばかりか、神に対して逆らうものであったのです。そのような私たちが救われたのは、ただ、神のあわれみによってでした。自分の罪のゆえに苦しむ私たちをまるでご自分の苦しみでもあるかのように、思いやってくださり、十字架によって救い出して下さったのです。

礼拝は、この神の救い、神のあわれみへの応答です。それで、パウロは「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」(ローマ 12:1)と言って、神のあわれみに対して応答しなさい、つまり神様がしてくださったことにあなたなりに応えなさいと勧めているのです。ですから礼拝とは、私たちが神に向かってささげるものですが、それは、私たちが「神を礼拝してあげる。」「神を賛美してあげる。」というものではありません。礼拝は、私たちから始まるのではなく、神が私たちのために成し遂げてくださった救いのみわざから始まるのです。神の救いがあり、神のあわれみがあって、はじめて、私たちは、それに対する応答として神を礼拝することができるのです。ですから神と神のみわざを知れば知るほど、神のあわれみを受ければ受けるほど、私たちは、それにもっと感謝をもって応答できるのです。

ローマ 12:1 は、次に、礼拝とは「からだ」をささげることであると言っています。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」という表現は、旧約時代に、祭司たちが神殿で犠牲をささげて礼拝していた様子を思い起こさ

せます。旧約時代、ささげ物のない礼拝はありえませんでした。人々は、必ず、動物のささげものを携えてきました。貧しくて動物が買えない場合は「家鳩のひな二羽」などが要求されました。穀物のささげ物もありましたが、穀物のささげ物にも動物のささげ物が伴いました。これは、私たちが、神に対して「物」ではなく「命」をささげなければならないということを教えているのです。そのことの意味は神は、私たちの持っている何かではなく、私たち自身を、求めておられるということです。時間や健康、財産や才能などといった、私たちの持っている一部ではなく、私たちのすべて、私たち自身をささげることを神は求めておられるのです。そこから具体的な形、実践と表れます。聖書で使われている「からだ」という言葉には、「全体」という意味があります。ですから、「あなたがたのからだを…ささげなさい。」というのは、私たちの身も心も、私たち自身を、私たちの人生のすべてをまるごと神にささげなさいという意味になります。

「からだをささげる」ということばは、また、私たちにキリストの十字架を思い起こさせます。イエス・キリストは、ご自身をささげものとして、神にささげられました。イエス・キリストは、「神の小羊」と呼ばれていますが、それは、キリストが大祭司でありながら、同時に、大祭司がささげる犠牲の小羊にもなられたということを意味しているのです。イエス・キリストは、私たちを罪から救い出すために、あの十字架の上で、ご自分を犠牲の小羊として、神にささげられたのです。私たちは、キリストがご自身をささげられたことによって救われました。聖書は、キリストの十字架の道は、ただキリストのためだけのものではなく、キリストに従う者も、キリストが歩まれたように十字架の道を歩むと教えています。ですから「からだをささげる」とは十字架をもってそのからだを神にささげられたキリストを思いなさいというだけでなく、私たちもまた、そのからだを神にささげるように求められているのです。新しくみことばを学び、静かに十字架のキリストを思い、自らの生き方を顧みる、それが礼拝のすべてではないのです。

「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」とあるところは、新改訳 2017 では「それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」と訳されています。もとの言葉は、「霊的な」とも「ふさわしい」とも訳せる言葉です。それは一般的には、「当然の」「理にかなった」「理性的」という意味で使われます。霊的な礼拝というと少し漠然としていますし、主観的な感じがします。パウロが伝えたいことは、キリストがそのからだをささげられたのなら、クリスチャンもまたそのからだをささげるのは、理にかなったことだし、当然のことであるということですので私もその訳の方が良いと思います。ですから今週の週報のみことばは新改訳 2017 を掲載しています。

2節には「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とあります。ここには、礼拝を通して、私たちの内面が変えられてゆくと教えられています。

「この世と調子を合わせてはいけません。」というところで使われている「調子を合わせる」という言葉と、「心の一新によって自分を変えなさい。」というところで使われている「変える」という言葉は、それぞれ、別の言葉が使われていますが、どちらにも「形づくる」という意味があります。そして、「調子を合わせる」という方は「外側から形づくる」、「心の一新によって自分を変えなさい。」というところでは、「内側から形づくる」という意味の違いがあります。つまりこの世は、私たちを外側から形づくろうとし、神は、私たちを内側から形づくるのです。

聖書が「この世と調子を合わせてはいけません。」というのは、その時代の文化や風習を一切拒否しなさいという意味ではありません。社会生活を断ちなさいということでもありません。ここでいう「この世」というのは、神に敵対する世界のことを意味しています。神を否定し人間をあがめ、神なしでも幸福な世界を作ることができるとする物の考え方、原理、生き方、価値観、人生観、世界観などといったもの

をさしています。そして形作られると言いましたがそれはちょうど建物を建てる時に枠組みを作ってそこにコンクリートを流し込むようなものです。時間が経つ間に強固なものとして形造られます。実はこの世は外側から私たちを形造りますがもともと人間は神のかたちに造られたのですが罪によってあまりにもその部分が形造られないでいるのです。私たちの目や耳に入ってくる情報の殆どは否定的なものと非人格的なものです。私たちは、知らず知らずのうちに、この世によって形づくられて、神から離れた物の考え方と生活に引っ張りこまれてしまっていると言えるのではないでしょうか?

「心の一新によって自分を変えなさい。」とある「心」には「理性」を表わす言葉が使われています。神を信じるとは、自分が中心だった世界観が神を中心とする世界観に変わることであり、自分の幸福が第一目的だった人生観が神の栄光を第一の目的とする人生観に変わっていくことなのです。私たちはこの世の価値観、世界観、人生観の影響を受け、ものの考え方がそうしたものによって形作られてしまっています。この世に形作られるのではなく、神のみこころに従ってものの考え方が形作られていくために、私たちは、礼拝をささげ、祈り、みことばを学ぶのです。ものの考え方がただされていくとき、私たちは意志の力を取り戻すことができるようになります。そして、意志の力を取り戻すとき、私たちの感情もまた変えられていきます。私たちの感情の大部分は、私たちのものの考え方から出ています。ものごとが正しく見えるようになり、意志にもとづいた決断ができると、今まで自分にとって心地よいと思っていた依存物が嫌なものになってきます。今まで自分が誇っていたものが罪だとわかると、それを悲しむようになります。自分を卑下していた人も、神の愛がわかると、自分の弱ささえも受け入れられるようになります。理性と意志による信仰は、私たちに人間らしい豊かな感情を取り戻してくれるのです。

車に定期点検が必要なように、私たちも、一週間ごとの点検が必要です。ある時、ア・カペラのコーラス・グループが歌うのをテレビで見たことがあります。その時、彼らは、曲と曲の合間に、音叉を使ってしょっちゅう音を合わせていました。これをチューニングと言いますね。私たちの信仰にも、そのようなチューニングが必要ではないでしょうか。そのチューニングの場が礼拝なのです。

最後に「心の一新によって自分を変えなさい。」ということばが 2017 では「心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。」となっています。これももとのことばは受動態、受け身ですから 2017 の方がより意味が明確になっています。私たちの考え方や人生観、世界観は強固なものであり、しかも日々強固にしつつありますからそれを自分の努力や精神力で変えることは至難の業です。それは意志力が弱いとか根性が無いと言う問題ではありません。それは神様によってしか変えることのできないものです。ですから神様に変えていただきなさいと言っているのです。ただし、それは自分は何もしないということではありません。夜、眠る時に神様私を変えてくださいと祈って寝たら、朝起きた時に変わっているということではないのです。神様に変えていただこうとするなら、少なくとも私たちは変えられやすい状態になっておく必要があります。それは神様のみこころに従順に従うこと、主が良きことをしてくださることを信じ、委ねて祈ることといったことでしょう。どうか主を信じ、主に従うならば、私たちの思いを超えたことを主がなしてくださることを期待しながらこの週の歩みを進めたいと願わされます。祈ります。